

がん患者のほとんどは抗がん剤を体験する。しかし副作用については、誰もが受け身の対応だ。患者にとっては副作用で死ぬか、がんで死ぬか、選択を迫られているようだ。

抗がん剤には錠剤と注射があるが、効き目は注射の方が早い。血管に直接入れ

がんから学ぶ

—がんサロン主宰者が語る—



1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱アジケン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンの益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

効き目に個人差 治療費も懸念

るのと飲むものではおのずと差はある。

私は膀胱がんだが、抗がん剤は膀胱内に注入したBCG以外は体験していない。BCGはさほど副作用もない。しかし週1の注入で6週継続した。効果は解らなかったが、いま現在ここに生きているということは効いたのかもしれない。

どの抗がん剤も決して安くはない。ある雑誌に書いてあった。治療費について67%、治療自体33%。これは患者が直面する心配の度合いだそうだ。

私の妻の場合はややこしい。最初抗がん剤はUFT。オペ後、何種類の抗がん剤に出会ったか。抗がん剤をやり出してからは常に腫瘍マーカー(CEA)の数値との対比となる。数値の多い、少ないで一喜一憂する。2種混合、経口剤のイレッサ等、友人の薬物療養専門医と相談しながらの投薬だったが、6種類の抗がん剤と出会った。最終はアリムタだった。強すぎたのかもしれない。抗がん剤の恐ろしさを体験することになった。あっけ

なく亡くなった。

抗がん剤の効き目は相当に個人差が出る。すぐに副作用の出る人、なかなか出ない人。最近では、入院で経過観察して、良ければ次回から外来での治療になる患者が多い。副作用も多岐にわたる。嘔吐から始まり、不快感、神経障害、皮膚障害、味覚障害、嗅覚障害、爪の割れ、頭髮が抜ける、あらゆる障害が襲ってくる。

医師も患者ももっと副作用について学ぶ必要がある。辛くても我慢する。そんな時代は過ぎた。抗がん剤は正常な細胞も死滅させるので、抵抗力をなくしてしまう患者が多い。子供と同じだ。無抵抗な患者が来てしまう。そのため抗がん剤治療もしばしば中断することが多い。いのちを落とす時もあるようだ。危険と隣り合わせのことが多くなる。「がん」という病気は、なかなか「完治」という言葉を使わせてくれない。真剣に対応しよう。医師にはかり任せないで患者自身が学び、賢い患者になろう。